

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

バスクを開く語り：フランス現代小説とバスク

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子, Takeuchi, Junko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1622

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



バスクを開く語り—フランス 現代小説とバスク

武 内 旬 子

目 次

1. バスクとフランス文学
2. 「問題」としてのバスクと語りの形式
 - 2-1. 発見の形式
 - 2-2. 「問題」と語り
3. フランスへのまなざし
4. 「バスク対フランス」を越えて

1. バスクとフランス文学

ギプスコア（スペインバスクの一地方）出身でバスク語、スペイン語双方で表現する作家ベルナルド・アチャガは1992年ストラスブールで開催された「ヨーロッパ文学シンポジウム」で、自らのバスク語作品に関し、「キョウトの読者を驚かせるようなことは何も書かれていない」と述べている。きわめて「特殊」で読者の少ない言語とみなされているバスク語による文学が、バスクとはおよそかけ離れた地球の裏側の読者—そしてこのキョウト（或いは日本）もまた特殊性を標榜してきた社会なのだが—にも十分理解可能であると、その「普遍性」を主張するのである。周辺のヨーロッパ文化とは隔絶し

1 Bernardo Atxaga, cité par André Gabasutou, "Eusukal Herria", in *Nations Basques*, Autrement, 1994, p.14.

たものという排他的アイデンティティ構成は、バスクナショナリズムの側にも、バスクを外から見る言説にも共通していた。しかし、このアチャガの言葉にもみられるように、古さ、孤立、純粋性をうたうそうした構成は変化しつつある。フランスの社会学者でバスク研究者ピエール・ビダールによると「長い間単一性の表現と理解されてきたアイデンティティが、今後は多様性という言葉によって考えられようになる。(中略)バスクアイデンティティも唯一の源泉—バスク文化とバスク語—によってのみ、その周囲にのみ存在し、これからも存在するだろうというものではない²」。謎めいたエキゾチスムの対象でもなく、閉鎖的な純血主義とも無縁のバスクを描く表現とはどのようなものなのか。周知のようにバスクはスペイン・フランスの両国家にまたがっており、フランス語で書かれた文学にもバスクを語るテキストは存在する。本論は、「キョウトの読者」が、現代フランス語小説のいくつかの分析を通して、今日のバスクをめぐる表現の特質を考察しようとする試みである。

フランスバスクは面積、人口³ともに、スペイン側よりはるかに小さく、フランス全体に対する政治的、経済的、文化的影響も、スペインバスクがスペイン全体に持つそれとは比較にならない。中央集権的な国家形成の歴史を持ち、普遍を標榜する文化を誇ってきたフランスには、バスクという行政単位すら存在しないのである（ラブール、バス・ナヴァール、スールのバスク3地方は、隣接するベアルンと共にバス・ピレネー県を構成する）。

しかし、フランス語による文学の最初の傑作とみなされる『ロランの歌』に、バスク人は奇妙な形で関わっている。史実においてシャルルマーニュ軍

2 Pierre Bidart, "Eloge d'une société basque complexe au sein d'une Europe complexe", in Bidart et al., *Le Pays Basque et l'Europe*, Baigorri, Izpegi, 1994, p.17.

3 およそ3000平方キロ、25万人。これは面積でフランス全体の約0.5%、人口で約0.4%にあたる。またスペイン側のバスク3県とナヴァラを加えたバスク7地方全体からみると、面積で約14%、人口で約8%に相当する。(1994年)

4 『ロランの歌』から20世紀小説まで、フランス文学の語るバスクの通史的概観については拙論「フランス文学におけるバスク」、竹谷和之他『バスク地方のスポーツ文化に関する総合的調査研究』（文部省科学研究費補助金・国際学術研究研究成果報告書、1998年、41ページから89ページ）参照。

をピレネー山中に襲ったバスク人は、武勲詩の中ではサラセン人にとって代わられているのである。この消去に始まるフランス文学において、ラブレーからヴォルテールを経てユゴーまで、バスクに関して我々はごくわずかな言及を見出しにすぎない。広くフランス語読者にこの地域とそこに住む人々を知らしめたのは、1897年に出版されたピエール・ロティの『ラムンチョ』であった。そして、消滅しつつあるエキゾチックな世界を郷愁をこめて描くこの小説は、その後長い間、バスクのイメージを固定する役割を果たす。

ところで、ここまで、フランス文学は常に「外」の視点からバスクを書いてきた。この状況に変化をもたらすのは20世紀前半の地方主義文学の動きである。これは、ほぼ第三共和政からヴィシー政権期に存在した文学現象で、文化的にも圧倒的な中央集権のフランスで、地方の独自性を前面に出す内容を特徴とする。一時は隆盛を誇ったものの、文学史の主流には軽視され、今日ではごく一部を除いて読まれることも少ない。この潮流を研究するアンヌ＝マリ・ティエスによれば、「この時代（第三共和政）についての広く流布している見方とは正反対に、フランスというナショナルなアイデンティティの称揚は、地方に根ざしたアイデンティティの否定によって行われたのではない。全くその逆なのである⁵」。ただし、それは「一にして不可分な」共和国の統一性をゆるがせるものではない。各地方は、多様で豊かなフランス（「大きな祖国⁶」）というイデオロギーを支える「小さな祖国」なのだ。言語を異にする地方の文学も、適度な《patois》（俚言）の使用は「フランス語を豊かにする⁷」として歓迎される。脅威とならない差異、中心を豊かにする周縁にとどまる限り、出版の機会も、同時代の他の傾向の作品よりむしろめづまれていたほどである。バスクもこのタイプのフランス語作品を持ってい

5 Anne-Marie Thiesse, *Ils apprenaient la France*, Editions de la Maison des sciences de l'homme, 1997, p.1.

6 "grande patrie" 次の「小さな祖国(petite patrie)」と共に地方主義文学が多用した表現。c.f. *ibid.* および Anne-Marie Thiesse, *Ecrire la France, Le mouvement littéraire régionaliste de la langue française entre la Belle Epoque et la Libération*, PUF, 1991, p.245.

7 *ibid.*, p.237.

る。⁸「外」からの視点で描かれたエキゾティスム小説は対象をステレオタイプ化して捉えがちであるが、⁹地方文学もまた「内」側から、その文化・社会を不変であるべきものとして描き、結果的に「フォークロア化」に手を貸す面を持つ。さらに、バスク人対他所者（主にフランス人、時にスペイン人）という対立の図式—それは同時に伝統対近代でもある—が多用され、純粹なるバスク人という神話を補強する。ただ、バスクの特異性がしばしば言語のそれを根拠として主張されるのに対し、フランス語で書かれたこれらの小説では、言語は必ずしも民族性の保証として最重要の位置を占めているわけではない。

1970年代以降、フランス語小説のなかにバスクをめぐる新たな語りが見られるようになる。書き手の欲望に合わせて作り上げられた対象でもなく、不変のフォークロアでもない、いわば生きた「問題」としてバスクを捉えようとするテキストである。本論がとりあげるのは、現代史の中で激しく動くバスクを様々な視点から物語る、クリスティアン・リュデル『エウスカディの戦士たち』（1974年、以下『戦士たち』と略。¹⁰）、フロランス・ドゥレ『エチェメンディ』（1990年¹¹）、クリスティアン・ラボルド『アンディアノアク』（1995年¹²）、マリ＝ジョゼ・バスルコ『亡命者』（1997年¹³）の4作である。60年代から70年代にかけてフランスでは、ブルターニュ、コルシカなどいくつかの地方で分離独立運動が盛んになる。バスクの場合、独立を求めるナショナリストの運動は、そのはるか以前からスペイン側で活発であった。歴史、規模、

8 上掲拙論参照。これらの作品においては、主に農村部の、バスク語話者である人々の会話も含めてすべてがフランス語で書かれ、しかも語られるのは、押し寄せる近代に抗してバスクの伝統を守るといふ物語なのである。

9 たとえばバスクでいえば、ベレー帽、マキラと呼ばれる杖、伝統競技であるプロト（ペロタ）、密輸、歌やダンス、家制度、熱心なカトリック信仰などが、バスク的なものを表す記号として繰り返し使われる。

10 Christian Rudel, *Les guerriers d'Eushadi*, J.-C. Lattès, 1974. 以下『戦士たち』又はGEと略。

11 Florence Delay, *Etxemendi*, Gallimard, 1990. 使用テキストはEdition Folio, 1992. 以下ETと略。

12 Christian Laborde, *Indianoak*, Albin Michel, 1995. 以下Iと略。

13 Marie-José Basurco, *L'exilée*, Le Temps des cerises, 1997. 以下EXと略。

内容などあらゆる面でピレネーの南北では相当の差が存在する。さらに一般のフランス人にとってバスクはバカンス地以上のものではなかった。しかし、スペインからの亡命者をめぐる問題や、南のETAに刺激を受けて北でも行われるようになったテロ活動は特に80年代以後、この地を新たな視点からとらえることを要請する。我々の分析しようとする作品もまた、そのような政治的状況と無関係ではない。なお、書き手の出自という点でいえば、「バスク人」はバスルコのみである。¹⁴

2. 「問題」としてのバスクと語りの形

地方主義文学の時代のテクストにおいて「バスク人」というアイデンティティはほぼ自明のものとされていたと言ってよいだろう。バスク語話者であり、ずっとこの地に住んでいる「素性正しき」民。しばしばその名字でもはっきり他所者とは区別される。時としてスペイン側から来てフランスバスクに住みついた人々もいるが、ユゴーの言葉を借りれば「条約や外交上の国境、自然の境であるピレネー山脈にもかかわらず、何者も断ち切ることのできなかった一つの秘められた深いつながりが、謎めいたバスクという家族のすべてのメンバーを結びつけている」¹⁵のだから、そこには問題はない。また、ロティの『ラムンチョ』の主人公はたしかに二重のアイデンティティに悩むが、それはフランスとバスクという、それぞれ自明の二つの起源の「混血」であった。

これに対し、現代小説がバスクを語る時のバスクアイデンティティははるかに複雑なものとならざるを得ない。以下に見るように主要登場人物の出自は多様で複合的である。そして、そのアイデンティティ構成は、今日の政治・社

14 バスルコはアンダイユ在住。他の三人はフランス人でリュデルはジャーナリスト。ラテンアメリカ関連の著作が多い。ドゥレは1941年バイヨンヌ生まれの小説家、大学でも教鞭をとる。ラボルドはベアルン出身の小説家。

15 Victor Hugo, *Alpes et Pyrénées*, in *Voyage*, Robert Laffont, 1987, p.781.

会的状況の中にあるバスクを語る形式とも緊密に絡み合う。本章ではまず、アイデンティティ構成が語りをどのように規定しているかを考察する。次に、文学テキストの中に政治的・社会的問題がいかに書き込まれていくのか、それによって問題がどのような新しい相貌を現すことになるのか見ていきたい。

2-1 発見の形式

4作中3作が90年代に発表されているのに対し、リュデルの『戦士たち』は74年の作品である。発表年代だけでなく、小説の形式としても4作中最も「古典的」な三人称の語りを持つ。大きく前後半に分けられるが、それはほぼ、中心人物である父子二世代の物語に対応する。父ピアレスはスペインバスクの出身でアギーレ大統領のもと、バスク政府の防衛に最後まで戦った闘士であり、政府瓦解後、フランスに亡命する。そのバスク人としてのアイデンティティには揺るぎがない。亡命後、レジスタンス活動にも参加するが、あくまでも南に独立国を再現することにこだわりつつける。それに対し、戦後生まれの息子アンリは北から南を発見していく立場にある。彼らの世代の若者たちは、当然一枚岩とみなされるバスクではなく、差異と統一双方の可能性を持つものとしてそれを考える。「パリを相手の戦争など想像もできない(GE 59)」北の人々を、バスクナショナリズムへの覚醒へと導き、南との連帯の可能性を探るにはそれが不可欠なのである。フランス人としての北の人々はまたフランスの行う戦争にも駆り出されるのだが、アルジェリア戦争を経験した登場人物の一人は、彼の地で知ったベルベル人との比較において自らの置かれた位置を自覚し、それがフランス人としてのアイデンティティに亀裂をもたらす¹⁶。また、ある政治討論の場面で参加者の一人は「フランスはほんとうに存在するのか(GE 275)」と問う。この問いに「そこにはブルトン人やコルシカ人、アルザス人、オクシタン人がある。フランス人なんてほんのわずかだ。フランスというのは一つの神話なんだ(GE 275)」と答え

16 c.f. GE., p.196.

る『戦士たち』は、地方主義文学を支えた「大きな祖国」という神話を無効にするのである。

リュデルの作品は先にも述べたように三人称で語られ、ピアレス、アンリ以外にも複数の焦点人物を駆使し、多くのエピソードを積み重ねていく。歴史的事実の書き込みも多く、歴史群像を描く「リアリズム」小説ともいうべき形式を保持している。後半の登場人物たちは、複合的なアイデンティティを持っているのだが、複合性そのもののダイナミクスが問われるよりも、各人が何らかの立場を代表するといった形式をとる場合が多い。また、姿を見せない匿名の語り手自体の位置、フランス人の作者が「客観的」にバスクを書く姿勢への問いかけは見られない。これらのことが、波乱に富んだ内容や多数の登場人物にもかかわらず、全体に静的で破綻の恐れとは無関係な語りを生み出している。

出版されたのはフランコの死の前年であるが、物語は、アンリらフランスバスクの若者たちが様々な葛藤の末、70年のETAによるドイツ領事誘拐事件を機に実力闘争への第一歩を踏み出し、アンリがブルゴス裁判の被告の家族を支援するカンパを届けに行ったスペインで官憲の暴力に斃れたところで終わっている。時代的にみてフランス側での IPARRETARAK¹⁷ などによる武装闘争が本格化し、テロをめぐる議論がフランスにとっても現実性を帯びる以前である。アンリたちの闘争も武装はしてもあくまで人を傷つけることのない道を選ぶという時点にとどまることが可能であった。この点でも『戦士たち』は運動の深刻な分裂や破綻の手前でとどまることが可能なテキストであった。

他の3作は、フランスバスクにおける武装闘争がほぼ終焉した90年代に発表されている。『エチェメンディ』『アンディアノアク』の2作も語りは三人

17 1974年創設の武装組織。88年に主要メンバーが逮捕されるまで、爆弾テロなどをおこなった。ただし、人的被害を伴う無差別テロは選ばず、数名の犠牲者は爆発物の扱いをあやまった実行者と、銃撃戦の犠牲となった治安当局者。

称だが、『戦士たち』と異なり、単一の焦点人物を持ち、語り手の位置は「中立」ではない。¹⁸ 題名は両者ともバスク語だが、¹⁹ 中心人物のアイデンティティ構成は単線的ではない。『アンディアノアク』の主人公ジョンはカリフォルニアからフランスバスクにやってきたアメリカ人である。祖父は渡米したバスク人移民、祖母はアメリカ先住民であることが途中で判明する。さらに彼は、自分は母が熊と交わって生まれたという神話を自らに与える。²⁰ 作中ジョンは「歓迎される他所者」から「排除される他所者」へと変化する。バスクに興味を抱く言語学徒にして評判のよい地元リセの英語講師という前者の立場から、自然保護を叫んで地元の発展を阻害しようとする邪魔者へと評価が一変するのである。ここでは、20世紀前半までの作品に多く見られた伝統を守るバスクの側と、それを破壊すべく侵入してくる外部という対立のパターンが崩れている。これについては後述するが、この小説は、単に血統の問題ではなく、バスク人を抵抗の民として自覚的に自らのアイデンティティ構成に取り入れようとする「外」から来た主人公の物語として読めるのである。ただし、テキストにバスク人社会が具体的に書き込まれるわけではなく、ジョンのバスク人論はいささか抽象的である。唯一、スペインからの亡命者をかくまったとして逮捕された夫婦に関する記述が見られるが、弁護士からの伝聞という形式が取られている。

ドゥレの『エチュメンディ』もまた複合的アイデンティティの持主を中心としたテキストである。フランスバスク生まれで典型的なバスク姓を持つ主人公は、物語の開始時点においては、出自について特に興味も疑念をもつことのなかった人物として設定されている。子供時代にメキシコに移住したという事情は、それ自体としては問題を引き起こすわけではない。スペイン人にしてはフランス語がうまいと言われたのに対し、反論はしないが内心自分

18 特に、『アンディアノアク』の語り手は時として主人公と同じレベルで語り始める。この点については後述。

19 エチュメンディはバスクの姓、アンディアノアクはインディアン（インディアンの意）。

20 「現実」の、つまり人間の父もテキストに現れる。

は《Basque Américain (ET 13)》²¹であると自己定義する。その際、「地下で祖父母が聞いているかのように(ET13)」感じるエチェメンディではあるが同時に、「古いことや、家族だの祖国だのは彼をうんざりさせる(ET13)」のである。ルーツ探しなどではなく、遺産相続上の事務処理をするためだけに出身地に戻ったこの主人公が、自分は誰なのかという問いを「民族」という回路を経て探求していく、その過程そのものが物語を構成する。従ってここでは、予め与えられた揺るぎなく明確なもの、外部からの攻撃に対して防衛すべきものではなく、むしろ、曖昧で、場合によっては本人の意図に反してすら変貌する可能性のあるものとしてアイデンティティが語られる。小説の終わりでエチェメンディが発見するのは、バスクという対象であると同時に、自らの、変容したアイデンティティでもある。

ところで、バスク人でありながら、民族の現代史をほとんど知らない状態でピアリッツ空港に降り立つ主人公は、読者が、無知の段階から、彼と共にバスクの現実を発見していくという語りの形式を生む。それはまた、「外」あるいは「常識」の視点を持ち込むことでもある。たとえば、反テロ法による政府の暴力を告発する民族派弁護士に対し、テロリストがいるから法律もできたのではという「常識」的意見を述べる彼が、「それこそスペイン政府の論理だ(ET 170)」という弁護士と同じ地平に立つ可能性を保証するのは、バスク人という出自ではなく、様々な人に会い、いくつかの状況を体験することで彼が実践していく探求なのである。この意味で、『エチェメンディ』というテキストは、ナショナリストの側に立ちつつも閉鎖的ではない。『バスクの』バスクの『亡命者』は本論の分析対象中、一人称の語りを持つ唯一のテキストである。語り手は、スペインからの亡命バスク人のフランス生まれの娘であり、その父は『戦士たち』のピアレス同様、かつてフランコ軍を相手に戦った経歴を持つ漁師である。家庭環境からもバスク人であるというアイ

21 この表現ではバスク人が名詞でアメリカのという形容詞が付加されている。バスク系アメリカ人というよりはアメリカのバスク人という「バスク人」の方が先行するニュアンスを持つと考えられる。

デンティティそのものは一貫している。しかし、エチェメンディの場合とは異なる形をとったある種の無知状態から、物語は始まる。フランス人の夫との結婚生活に破れて実家に戻った時点での語り手の、「問題」としてのバスクの認識はゼロに近い。少なくとも、個人的な感情の記述を主とするテキストには全く現れない。舞い戻った両親の家に一人の亡命バスク人ミケルが寄宿している。彼との恋愛が語り手を「問題」の渦中へと導く。「こんなふうには私は始め、影の活動家になった。まずミケルのために、ついで大義のために。私の火の洗礼、それを私は一人の男の美しい眼のために、愛する女の輝きの中で行ったのだ(EX 63)」と、語り手は、政治活動への参加の私的、感情的動機を正面切つてうたう。さらに、ミケルが国外追放でキューバへ渡って後、今度はフランスバスクの活動家カールとの共同生活が始まる。カールは、バスク人の大義のみならず社会主義革命のために働く革命家であり、語り手は彼の左翼思想と向き合わざるをえない。民族の大義も革命も、まず恋愛あってこそという『亡命者』の姿勢を鮮明にしているのは一人称の語りである。『エチェメンディ』も恋愛の物語であるが、それは重要ではあっても独占的ではない構成要素の一つである。語り手はエチェメンディに重なることも多いが、三人称の語りに独自の距離が消滅することはない。複合的アイデンティティ構成という時の複合性に個人的感情のレベル（愛する女）を持ち込む『亡命者』はしかし、政治性や社会的問題から遠いのではない。それどころか、パスルコの語りは徹底的に一人称にこだわることで、政治や社会運動の「客観性」という建前をひっくりかえしてみせるという点で、4作中最も「ラディカル」でさえある。なお、左翼革命運動との関係に言及する『亡命者』は、他の3作にもまして、バスクナショナリズムが「民族」で一元的に括れる運動ではないことを示唆している。

2-2 「問題」と語り

本論の分析対象である文学テキストはいずれも、語りの中に政治的、社会

的問題を深く抱え込んでいるという共通点を持つ。しかし、その書き込みの形式は一様ではない。たとえば『戦士たち』と『亡命者』は対照的な一組を成している。『戦士たち』は先にも述べたように歴史的事実の書き込みも豊富で、フィクションの登場人物が歴史的文脈に無理なくはめ込まれる「リアリズム小説」である。焦点人物は存在するものの、語りの主眼は集団の運命にあり、個々の人物は歴史群像の一人一人としてバスク共同体との関わりのもとに描かれる。民族の独立をめざす戦いにどのように貢献するかという視点のもとに数多い登場人物が配されるのである。そうした問題設定からはずれる個人的感情や生活はこのテキストに場を与えられていない。

これに対し、歴史的文脈に深く関わっているという点では同じでも『亡命者』の語りは正反対の方向へ向かう。『戦士たち』が公的、集団的、客観的であるとすれば『亡命者』は私的、個人的、主観的と整理することもできるだろう。公の「歴史」には決して書かれることのない、恋する女の視点に貫かれた、もう一つの「歴史」の書き方をこの小説は実践してみせる。超越的な展望とは無縁の個人の場に立ち続けることは、必ずしも言葉が現実と関わる強度が弱いことを意味するわけではない。たとえば、権力の暴力に斃れた者をめぐる記述が双方にあるが、『戦士たち』の「整然」とした（「落ち着きと沈黙。尊厳と熱気(GE 332)」）アンリの葬儀を書く整然としたエクリチュールは、世代を越えたバスク人の連帯や、運動の未来を肯定的に暗示する機能を果たしている。一方、GAL²²の凶弾に倒れたミケルを悼む『亡命者』の語りは、ほとんど語り手の錯乱状態に寄り添って進む。政治的マニフェストの場としての葬儀も記述され、群衆の叫ぶ「自由なバスク万歳(EX 202)」「武装ETA万歳(EX 202)」といったスローガンもバスク語でそのままテキストに現れるのだが、語り手の「私」は耐え切れずにその場を逃れる。

「ミケルの遺灰の色をした暮れていく日の光の中、私は崩れおちた。

22 ETAのテロ活動に対抗すべく作られた秘密極右テロ組織。1983年から87年にかけてフランスバスクで27名を暗殺した。今日ではスペイン政府の関与が明らかになっている。

花壇のそばに跪いて、ミケルの声をもう一度聞くために頭を破裂させようと、船乗りの歌にあわせて体を揺らし続けた……私の心、私の愛する人、あなたはどこにいるの？（中略）

私は塩辛い歌を頭蓋骨に混ぜて、まるで年老いた雌犬のようにフロントンの方へ戻っていった。」（EX 203）

この場面はまた『戦士たち』の「男性的」性格と『亡命者』の「女性的」性格が好対照をなす部分でもある。全体としても前者には女性登場人物はほとんどなく、特に、重要人物には皆無である。葬儀の際「エウスカディの男たち」が故人の両親に挨拶する。

「彼らは単純に、偽りの悲嘆もこれ見よがしの涙もなしに彼（父ピアレス）のところにやってきて、ほぼ同じことを簡潔な言葉で言った—おまえの息子はバスク人だった！—（中略）、彼はそれを理解した、しかし、彼の妻は、この数少ない言葉の中に、一人の男に、一つの民族に与えられる愛情、友情、忠実さ、信頼がこめられていることを果たして理解できただろうか。」（GE 325）

装飾疑問文の意味せんとするところは明らかであろう。この葬儀には錯乱する女など存在しない。「戦い以外に出口はない。ならば、静かに、落ち着いてそこへいっただけだ。「アンリ、今度は僕の番だ」とひげのジャックはつぶやいた。何十人もの青年たちがこの瞬間同じことを考えていた（GE 332）」そこに鳴り響くのはもちろん恋歌のはずもない。「もし同志が倒れたら、彼をとりあげさらに前進を続けよ（GE 332）」とうたう「莊嚴にして恐るべき（GE 332）」男声合唱である。『戦士たち』が文字通り男性戦士のみによって

23 バスク独特の球技プロト（ペロタ）の競技場。

担われる歴史と戦いを描くのに対し、『亡命者²⁴』は一人称のもつ「主観性」を駆使するテキストであり、その一人称は徹底して「女」それも「愛する女」の位置にとどまろうとする。暴力の政治的意義よりも、それがもたらす破壊や悲惨、『戦士たち』には不可視の歴史を、触知可能なものにするエクリチュールなのである。

『アンディアノアク』における、文学と社会問題との接合には、他の3作に比べて想像的なものがより大きく働いている。キーワードとなるのは「熊」で、フランス語の他、英語の形でも頻出し、主人公ジョンの姓 Harza もバスク語で熊を意味する。それはまず、絶滅の危機に瀕した野生動物（ピレネー山中に生息する西ヨーロッパ最後の野生の熊）であるが、現実の熊としてテキスト中に現れるのは檻に囚われ、マルタンと名付けられた一頭である。比喩的な熊としては、ジョンが、立ち上がった熊の姿形にみたてる山があり、自然破壊の開発に抗議するジョンが纏う扮装としての熊がある。さらに、母と交わる熊が、ジョンの起源神話の中に存在する。『アンディアノアク』の熊は、経済優先の近代化路線に対する抵抗の象徴なのである。バスクは、脅かされ、かつ抵抗するものとして熊やアメリカ先住民と並列に置かれる。後者との関係については後述するが、熊に関しては、バスクを絶滅危惧動物化するくらいがないとはいえない。バスク人が間接的にしか登場人物として現れず、その社会が具体的に書き込まれることがない分なおさら、たとえ抵抗の象徴であるとしても、その危険は大きい。

『アンディアノアク』の独自性は、言語自体に抵抗の力を認め、語りの言葉が、ストーリーを紡ぎ出すのみならず、そのまま抵抗の身振りとしてテキストに現れる点にある。すでに冒頭の法廷の場面で、主人公やその弁護士の発言に、言語へのこだわりが見て取れる。

24 原題では「亡命者」は女性形であり、語り手を指示していると考えられる。この意味については4章で取り上げる。

「結構です、裁判長！どちらにせよ、バスク語の言葉にはフランス語よりたくさんの風が、気取りが、情熱が、陽気な反抗があるんです。Insumisia²⁵というのは踊る言葉なんです、裁判長。踊る言葉は神々です。泥でできていて、羽があるんです。ぼくは踊る言葉が好きなんです、裁判長！」(I 18)

弁護士は詩的言説で法廷を煙に巻くジョンを援護するために、文学の国というフランスの「ブランドイメージ」を利用する。「フランスは言葉の国、作家の、詩人の国であることを自慢している(I 20)」にもかかわらず、壁に詩を書くジョンを告発するのかと問い、「壁は排除された者、抵抗する者の新聞(I 21)」であり、そこでは真実が語られるのだと主張する。「詩人たちよ、君たちを愛する(I 20)」というフランスの偽善性に、書くという行為自体の持つ挑発的性格をつきつけるのである。²⁶

フランス語自体がバスクに対してふるう暴力についても、ユーモアを含んだ「詩的」言語がそれを語る。以下に引用する一節を含んだ章は全体が散文詩のような形式をとっており、大半が語り手の直接の言表として構成されている。²⁷ 亡命者をかくまったとして逮捕されたチェミの裁判で裁判官が言った「二次的言語(*langue secondaire*, I 99)」という語が頭韻のように繰り返される、叫びにも似たパラグラフが続くのだが、²⁸ 其中でチェミの言葉として引用されるのが以下の箇所である。

25 不服従の意。ジョンが裁判所の壁面に書いた文字(IとA)によって表現しようとした言葉。彼はこれによって公共の建物を汚した罪に問われている。なお、彼の祖父はこの不服従を実行して、すなわち徴兵を忌避してアメリカに渡ったとされる。

26 今日のフランスでは町中の壁に多くの落書きが見られる。反権力的性格のものもあるが、人権差別的内容のものも多く、一概に抵抗者が真実を暴く場とは言えない。

27 散文詩的な形式をとる箇所は、今しも逃がそうとする熊のマルタンにジョンが呼びかける場面にも用いられる。そこでは発話主体はジョンだが、「現実」の場面としては異様に長いせりふであり、各パラグラフの最後が「私はジョン・アルサ」という同じ一文でしめくられるなど詩的様相を帯びている。(I 144-147)

28 《*secondaire*》という語には、時間的順序として二番目のという意味の他に、重要度からみて二番目の、二流のといった意味もある。

29 たとえば「二次的言語！ 二次的、それを受け取り、話す人々は！ 二次的、それが指し示す木々は！(中略)/ 二次的、チェミの言葉、チェミの苦痛、独房でのチェミの足音！/ 二次的、拷問されるアンヘルの叫び！」(I 99)

「《啓蒙思想！その普及員は我々の口は規格に合っていないと言った。（中略）福祉国家は、つましく辺鄙な我々の里に共和国の発音矯正士を送り込んだ。彼は我々の口蓋を削り、声帯を変え、別の唾液を注入し、共和国仕様の音節の話し方にと調節した。そこで我々はやっと啓蒙の言葉で啓蒙思想を受け取ったというわけだ。》」
(I 101)

他の3作品にも言語をめぐる記述がないわけではない。特に、バスク語で教育をおこなう学校イカストラについては、『アンディアノアク』を除く全部に何らかのエピソードが存在する。『アンディアノアク』の主題はむしろ詩的言語の持つ秩序攪乱の力にあり、現実のバスク語の擁護や復権よりも、抵抗の言語としての象徴性の方が重要視される。従ってイカストラ支援運動を語るよりは、多分に寓話的性質を含んだテキスト自体が、抵抗する主人公の身振りとなっていくのである。

『エチェメンディ』は『アンディアノアク』に比べればはるかに「散文的」ではあるが、物語の展開と「問題」の提示が互いを支えあう構造になっている。主人公が叔父の遺産相続の手続きを完了するために、その養子アンチョンを見つけだす必要があることが判明する。当初、この人物は所在どころか生死のほどもわからない謎として主人公の前に立ち現れる。アンチョンを探す旅—大半がスペイン側—が、バスク発見の旅に変化してゆき、先にも述べたようにアイデンティティ自体の変容を引き起こすのである。だが『エチェメンディ』には、もう一つの旅、もう一つの探索が存在する。

物語の冒頭、深夜に見知らぬ家にさまよい込んだエチェメンディは、そこで一人の女性に意外にもあっさりと受け入れられる。ついでそれが人違いによるもので、自分が警察に追われているバスク人「テロリスト」ビダール³⁰と

30 実在の人物。フランスバスクの武装組織IPARRETARRAKの指導者の一人。長期に渡って警察当局に追われていた。一般にもこの名はよく知られており、エチェメンディがこの名を知らないことが、彼の「外部性」を強調する。

間違えられたことを知る。他者から与えられた誤ったアイデンティティが物語を始動させるのである。一方彼のほうでも女性の名乗った《Ramone》という名を男性名《Ramon》と聞き違い、一瞬相手の性別にとまどう。二人が別れた直後から、誰とも知れぬこの女性を追うエチェメンディの探求が始まる。Rとだけ署名した伝言を受け取った彼は、彼女にとって自分が Julián (スペイン), Julen (バスク), Julian (フランス) の誰なのか自問する³²。また、返事を書こうとして彼は「スペイン語で書くのかフランス語で書くのか、外国人としてか愛人としてか (ET 72)」迷う。ロティの主人公の名も3つのバリエーションを持っていたが、ロティはあっさりと「同じ一つの名」³³という解答を与えていた。しかし、ここでは、誰として書くのかという問いは登場人物エチェメンディにつきまとうのみならず、フランス語でバスクを語る『エチェメンディ』というテキスト自体に投げかけられてもいるのである。

個人レベルの物語が、一つの社会、一つの共同体の物語と交差し、相互に照らしあう関係をこの小説は作り出しているのだが、権力による弾圧が書き込まれる場合にも、それが物語から孤立することはない。弾圧は殺人や拷問という形でだけ行われるのではない。毎週末、バスクからなるべく遠い刑務所に収監されている家族に、時間と体力、忍耐力の限りをつくして面会に行く女たちのエピソードは、日常生活の中で静かに、しかし確実にのしかかってくる抑圧の一形態を露わにする。主人公は彼女たちに同行し、ラ・マンチャ地方の監獄でついにアンチョンに出会う。そしてバスクは、エチェメンディの中で単なる祖先の地でも、自分とは無関係なテロリストの地でもなくなる。『エチェメンディ』はある種の開始で終わる。ラモヌとの恋愛は関係が端緒についたところであるし、エチェメンディはバスクに戻ることを決意してメキシコに向かう。ナショナリズムやテロについての議論で、開かれた姿勢を

31 これらの誤解は別れる以前に解かれるが、名前以外の「身元」についてはお互いに無知のままである。

32 c.f. ET 47-48

33 Loti, *Ramuncho*, Gallimard, 1990, p.29. なお、ロティの主人公の名はエチェメンディの求める女性の名の男性形である。

維持してきたテキストは、出口もまた開かれているのである。

3. フランスへのまなざし

フランス語でバスクを語るこれらのテキストは、バスクをのみ語っているのではない。そこには、同時にフランスの姿が現れてくる。バスク人作家バスクが鮮明にフランス批判を打ち出しているだけでなく、他の作家にとってもフランスのあり方は自明のものではない。

『戦士たち』には他の3作にみられるような直接のフランス批判は少ないのだが、その中に『ロランの歌』にまつわるエピソードがある。アンリらが実行しようとする武装闘争にはどうしても参加できないが、別の方法で運動に貢献したいと願うジャックが試みる、ロンスヴォーの戦いの、バスク人の視点からの語り直しである。バスク人の子供にお話をするという形をとり、くだけたユーモラスな言い回しでシャルルマーニュのイベリア半島遠征の顛末が語られるのだが、バスク人の軍事的勝利そのものよりも、その事実がどのように隠蔽され、変えられてしまったかに重点が置かれる。

「不敗軍が負けた……数でずっと勝り、よりよい装備を備え、百戦錬磨で、何でもいいけどそういう敵にしか負けられない。アラブ人、イスラム教徒だ。バスク人だなんて、バスク人だけは困る！異教徒に敗北、結構、それは名誉だ、大目に見てもらえる。でもゲリラに負けたなんて、それだけは絶対だめだ！知れたこと、どんな軍隊だってそれだけは認めない！」(GE 283)

34 たえば遠征の理由は次のような調子である。「彼(シャルルマーニュ)は広い平野や山にうんざりしてたんだ。太陽とビーチがほしくなった。で、ある日スペインへ行こうと決めた。(中略)ただ、アラブ人がいてはくらの皇帝がちょっとしたプライベートビーチを作るのを邪魔してたんだ。」(GE 282)

そしてこの「お話」の語り手は、歴史にはこういう改変がしばしば起こることを子供に伝えようとする。

このほか、先にも引用したように『戦士たち』にはフランスの多民族的構成を示唆する一節もあり、フランスを批判的にとらえる視点に欠けているわけではないが、全体として関心はピレネー山脈の向こう側に向いており、はるかに遠いパリはあまり影響力を持たない。これに対し、『アンディアノアク』ではフランス中央権力との直接の対決で幕が開く。この小説の第1章と最終の24章はともに、共和国権力を体現する裁判官、検察官、警官などと、「熊」の名のもとにそれに抵抗する主人公のぶつかりあう法廷の場面である。1章の一部分はそのまま最終章に繰り返され、テキストを通じて戦われたジョンの戦いの空しさ、あるいは権力の強固さが表現される。が、同時に最終章では、横断幕をかかげてジョンを支持する一握りの人々が登場する。注目すべきは、対立の構図が伝統的なバスクフランスではないことであろう。開発推進派は外部からの侵略者ではなく、地元出身を強調する政治家であり、その追従者である。ジョンは外国人のくせに地元民に異議をとなえるとして非難される³⁵。しかし地元民であることをことあるごとに繰り返す開発派や御用新聞がバスクという語を用いることはない。『アンディアノアク』のテキスト内の論理ではこの語を標榜する権利があるのは強者に抵抗する側である。この論理は、バスクを反権力の象徴として普遍化する機能も果たす。バスクがその独自性においてフランスと対立するのではなく、反権力の立場にあるものがたまたまバスクであったとすらいい得るのである。

『亡命者』の反権力闘争は逆に、バスクの独自性にこそその根拠を求める。パリの中央権力による弾圧も、スペインバスクからの政治亡命者を、バスクからなるべく遠い地方へ強制的に居住させたり、国外追放や強制送還、さら

35 他所者と同時に信用ならない不穏分子として攻撃対象になる者に《RMistes(I 131)》がある。長期に渡る失業などで社会から排除された人々が激増したフランスで、その人々が社会に再度参加するための最低限の収入を保証しようと始められたRMIの制度であるが、その受給者を、働きもせずに税金で暮らそうという意図者として非難する人々も存在する。

には直接スペイン当局に引き渡すといった、個別バスクを狙うものとして記述される。フランス国内の政治状況との関連でいえば、ミッテランの大統領当選によって一時高まった、バスクの自立性推進の期待が裏切られたことへの激しい失望なども描かれる。³⁶ 現代政治だけが問題なのではない。フランスは教育を通して起源の神話を子供たちに植え付けることでバスク人に自らの出自を否定させる。語り手は小学校で、「我らの祖先ガリア人」³⁷と教える教師に自分の祖先はバスク人だと主張して罰を受ける。語り手は自身の子供たちを当然のこととしてイカストラに通わせる。この学校はスペインバスクではかなり普及しているが、フランス側では圧倒的にマージナルな位置にある。その特殊な位置自体への言及はなく、その欠如は語り手の、バスク人がバスク語で教育を受けるのは当然であるとする姿勢をより鮮明にする。しかし、語り手の子供たちの父親はフランス人で、それには言及もある。「我らの祖先ガリア人」に「我らの祖先バスク人」を対抗させるだけでは現代バスク社会はとらえきれないと思われる点について語り手は必ずしも積極的に語っていない。

『亡命者』のテキスト自体はむしろ単一ではあり得ない状況の表現になっているのではないだろうか。フランス人が、たとえバスクに住んでいてもバスク人とは異なる人々として字体の差異で提示される箇所がいくつかある。フランス人の本音としてイタリック体で他の部分とは区別して書き込まれた部分である。³⁸ たとえば、フランコの死を祝う亡命バスク人を中心とした人々に対して「フランコが死んだ！それで、それがどうしたというんだ、こんなに騒ぐほどのことかというんだ(EX 36)」という具合である。バスクの統一やバスク語擁護の示威行動に関してはさらに侮蔑の言葉が姿を見せる。

36. ミッテランは選挙運動中、バスクだけで一県を作ることやバスク語教育の推進などを公約していたが実現されず、それどころか、スペインに社会党政権が誕生してからは、仏西両政府の合意に基づき、亡命者の引き渡しなどが強行された。

37. とりわけ第三共和政下の学校で教えられ、よく知られた表現。今日でも起源の「神話」を指すものとして引用される。

38. ただし、イタリック体はこの目的以外にも用いられている。

「奴らにはうんざりだ。(中略) 年がら年中同じお題目をちょっとは変えようって気はないのか。4 + 3 = 1³⁹なんてがなりたてやがって。計算もできないのかこのろくでなしどもは。」(EX 91)

「やつらは自由じゃないっていうのか、このろくでなしどもは。家族手当や社会保険はいらないのかい、この安物の戦士たちは！」(EX 93)

同じフランス語でありながらイタリックのこの部分が「フランス人」のフランス語で、普通字体で書かれた部分はバスク人のフランス語と読むことも可能である。しかもそれは、両者の対立、特にフランス人の無理解を意味する内容なのである。しかし、見方をかえればそれは、バスクの独自性の主張をフランス語でおこなうことの可能性をも示している。全体がフランス語で書かれているこのテキストには相当数のバスク語表現が挿入されており、巻末にはフランス語訳の一覧がついている。これはエキゾチズムを売り物にする小説などにみられる装飾としての異言語ではない。恋人への呼びかけ、ナショナリストのスローガンなど、フランス語には譲れないものの表現なのである。『亡命者』は、フランス語で書くことはフランスに同化したり、擦り寄ったりすることではないという主張を自ら実践してみせる。

『エチェメンディ』が他の3作と異なるのは、フランス側のバスクとの連帯の可能性が書き込まれていることである。『亡命者』のイタリックが、唯一あり得るフランスの対応なのではない。主人公を「テロリスト」と間違えて匿おうとした女性はバスク人ではない。パリに住み、そこでは移民の医療にも携わる医師という設定である。彼女はスペインバスクで開催された国際連帯集会にもフランスからの協力者として参加する。エチェメンディが追い

39 南北バスクの統一を主張する際の代表的スローガン。バスクの7つの地方が一体をなすことを意味する。

求めたのは、一つにはバスクであるがもう一つはフランス人女性だったわけである。この女性もパリに住みながらビアリッツに別荘を持つ、『亡命者』の視点からするとバスクを植民地化する輩の一人である。しかし、たとえばロティのような、所有し、自らの欲望に合わせて変形しようとするやり方とは異なる他者との関わり方を、『エチエメンディ』は示唆する。フランス政府による強制送還などに対する批判は、『亡命者』とも共通するが、ここではその他、現代フランス知識人のバスク問題に関する沈黙が批判の対象となる。ヴェトナムやアルジェリアについては発言した知識人たちが、より近いバスクについて何も言わないのはなぜか、と。フランス語でバスクを語る作品を書くこと自体、それを取り巻く沈黙を破る行為であろう。自伝的要素の強い⁴⁰『亡命者』の作者には、その点をはっきり意識されている。『エチエメンディ』では語り手自身は前面に出ることはないのだが、国際集會にラモヌ同様フランスから参加するメンバーのリストにさりげなく、女性小説家として《Florece Velay》の名が書き込まれている(ET 196)。いうまでもなく、『エチエメンディ』の作者Florence Delayの、一字違いの「変装」である。このテキスト全体を貫くユーモア感覚が生かされた茶目っ気のある方法で、自らの書く立場が表明されているのである。

4. 「バスク対フランス」を越えて

フランス革命以後、フランスバスクは「フランス」に対抗する形でバスクアイデンティティを構築してきた。しかし、今日、この構図は全てを規定するものではなくなっている。上にも見てきたように、バスク性の主張の中にもすでに複合的な視点が入って来ざるを得ないのである。バスクとフランスという二項対立はどのように変化していくのだろうか。

『戦士たち』が、はっきり南を向いた作品であることはすでに述べた。舞

40 『亡命者』に付されたジル・ペローの序文による。

台であるフランスバスクが、フランスの一部であるよりはまずバスクの一部であること自体を、このテキストは語っているといえるだろう。フランスはむしろ批判の対象となるが、具体的に、闘争の相手として書き込まれてはいない。フランスからその一部が無理矢理独立するというのではなく、当然のこととしてバスクはピレネーをはさんだ両側から成り立つのである。しかし、バスク政府崩壊の時点から始まる物語は、あくまでも「ナシオン」としてのバスクの可能性を希求する姿勢を失わない。同じく南指向の『亡命者』でも、対フランスの議論や行動よりも、失われた半身としての南といかに連帯するかが重視される。恋人ミケルとの結びつきと、南北バスクの統一とが重ね合わされ、どのようなナシオンを求めるかよりも、感情的一体感の方が先行するのである。ミケルが語り手をおいてキューバに渡った後、北出身のカールが代わりとなるが、この二人の関係で特徴的なのは、民族主義的運動に階級闘争の要素が加わることである。『戦士たち』において、世代間の相違や戦略をめぐる意見対立はあっても、基本的に、一つのバスクを求める戦い一つであった。『亡命者』はバスク内にも走る亀裂を、階級という視点から描く。カールは誇り高い労働者の自分に比べて語り手をプチブルと批判する。ただ、二人の関係を破綻に追い込むのは、階級的対立というよりは、革命理論をかざしながら語り手に対しては支配的であったり、暴力をふるうカールの態度である⁴¹。なお、題名の「亡命者」⁴²とは、ミケルの死後の絶望とカールによる拒否の中で、カールと共に修復した家の屋根裏に一人「亡命」する語り手を指す。一軒の家の中に切断線が走り、語り手がフランスバスクを一步も出ることなく「亡命」状態になってテキストは終わる。

国境線をめぐるバスクの物語に新たな線引きをもたらすのは「ヨーロッパ」である。バスクに限らず、ヨーロッパの、「国家」をもたないエスニックグ

41 4作のうち、男性作家による『戦士たち』と『アンディアノアク』には女性は全く補助的にしかでてこないが、女性作家による『亡命者』と『エチュメンディ』では主体的に行動する女性が登場する。

42 原題では女性形。

ループにとって統合は、「国家」以外の存在形態の可能性を広げる、肯定的変化としてとらえる向きが多い。第一章でも引用したビダールらの『バスクとヨーロッパ』は、同名のフォーラム参加者15名による論集だが、そのうち1名は、統合が、一部のすでに先進的な地域の経済的独占を強化し、そこからはずれているバスクがますます周縁化される危険を訴えている。⁴³その他の論者は、新しいヨーロッパのあり方はバスクにとってプラス要因であるとする点で一致している。本論の4作のうち、ヨーロッパが前面に出ているのは『アンディアノアク』だが、そこでのヨーロッパは戯画化された悪役である。法廷場面等で繰り返され、否定的ニュアンスを持つ「(フランス)共和国」が敵の一つであるとしたら、それを上回って繰り返され、その繰り返し自体が滑稽な効果を生み出しているのが「ヨーロッパ」という言葉である。それが指示するのは開発と経済発展優先の価値観であり、それこそがこの地域を外へ—ヨーロッパから、世界、銀河まで、と戯画化される—と開き活性化するとされる。ヨーロッパ主義者が何より恐れるのは取り残されること、孤立することであり、スローガンは《déenclavement⁴⁵(I 130)》である。これに対し、これまでのフランス化の回路を経た近代化が、「ヨーロッパ」に取って代わられただけではないのかと問う『アンディアノアク』がその対極に置くのがバスクーインディアン—熊の連帯である。「外」からきた主人公が、開発型開放とは異質の開かれ方を探ろうとするのがこの物語であるともいえるだろう。

バスク以外を射程に入れる方法として他の先住民が語りに引き入れられる例は『アンディアノアク』以外にも『エチェメンディ』に見られる。国家を持たず、国家によって周縁化された者という共通点が指摘される。『アンディアノアク』が過去の(祖父母の)物語か、寓話的なものかという形式しかと

43 Jean-Michel Uhaldeborde, "Entre intégration et marginalisation, une dynamique ambivalente pour le Pays Basque dans l'Europe", in P. Bidart et al., *Le Pays Basque et l'Europe*, pp.143-159.

44 バスクという語やその他地名が具体的に現れることはない。

45 僻地が開発されること。

らないのに対し、『エチェメンディ』は現代のアメリカ先住民が具体的にスペインバスクを訪れるエピソードを持つ。しかしここでも、近代農業を誇るバスク農民に向かって大地への冒涇だとそれを軽蔑する役割を担い、『アンディアノアク』同様「エコロジーの代表者」とでもいうべきステレオタイプ化を指摘することは不可能ではない。

フランス内部の他の少数派に対するまなざしもまたバスクを開く視点の一つであるといえるのではないだろうか。『アンディアノアク』の主人公のガールフレンドはサミラというアラブ系の名をもっているがフランス文学専攻の学生ということ以外、彼女の出自に関する記述はない。説明の必要もない当たり前のこととして、登場人物の一人なのである。『エチェメンディ』のラモスがパリで移民の医療に携わっていることも、マイノリティへの関心および国境を越えた連帯の2点において、この登場人物の一貫性を構成している。なお、彼女の出席する国際集会には、ラテンアメリカ各国の他、コルシカ、ブルターニュ、カタロニア、アイルランド、デンマークやベルギー、フランスなどからの参加者がいる。

バスク人は理解されないことを誇りに思っているのではないか、孤立しコミュニケーション不能であることに満足しているのではないかと問うエチェメンディに対し、一人のバスク人が叫ぶ。

「私たちが孤立してる、コミュニケーション不能だって！冗談じゃない。（中略）ここじゃみんなバイリンガルだし、ほとんどは三カ国語をしゃべるんだ。私たちから引きこもっているのは世界の方だよ。孤立しているのは世界の方なんだ。」（ET 180）

フランス語で書くこと、フランス語でバスクを語ることも意味も変化していく。フランスへの同化でないのはもちろんのこと、「バスクから孤立している」世界へ向けて紹介するというだけでもない。「世界」と同じ位バスクも

複合的であることは、上に見てきた通りである。すでにフランス語表現もバスクを構成する一要素であるという地点から語りは始まらざるを得ないだろう。バスク出身でない書き手の書くバスクも、複合的あり方と直面する点では同じである。それは、自らの自明性を問う—たとえば、フランスは存在するのか、どんなフランスが存在するのか—語りと直面することでもある。バスクを語ることが開いていくのはバスクだけではない。

使用テキスト

- BASURCO Marie-José, *L'exilée*, Le temps des cerises, 1997.
DERAY Florence, *Etxemendi*, Edition Folio, Gallimard, 1992.
LABORDE Christian, *Indianoak*, Albin Miche, 1995.
RUDEL Christian, *Les guerriers d'Euskadi*, J.-C.Lattès, 1974.

引用文献

- BIDART Pierre et al., *Le Pays Basque et l'Europe*, Baïgorri, Izpegi, 1994.
HUGO Victor, *Alpes et Pyrénées*, in *Voyage*, Robert Laffont, 1987.
LOTI Pierre, *Ramuncho*, Gallimard, 1990.
THIESSE Anne-Marie, *Ecrire la France. Le mouvement littéraire régionaliste de la langue française entre la Belle Epoque et la Libération*, PUF, 1991.
Ils apprenaient la France, Editions de la Maison des sciences de l'homme, 1997.
Nations Basques, Autrement, 1994.